## 414 び漫性肝疾患における肝シンチグラムのpattern characterization

黒堅賢仁，玉木恒男，飯田昭彦，松尾導昌，
河野通雄（名古屋市大　放）
井上忠昭（神戸掖済会　放）

computerを用いることにより，肝シンチグラムにおける客観性，再現性のある変数の抽出を試み，それに基づく肝疾患の鑑別診断の可能性について検討した。生検にて診断の確定したび漫性肝疾患29例について，肝シンチグラフィーを行い，そのデータをon line computerに直接入力し，画像処理を行い種々の変数を設定した。この変数を用い判別分析を行った結果，診断者間に差のでない純客観的変数を用いた場合 29例中23例（79.31%），設定変数すべてを用いた場合 29例中29例（100.0%）の正診率が得られた。症例数が少ないながらも，高い正診率が得られたことは，今回設定した変数で，び漫性肝疾患の鑑別診断は可能であると考えられた。また，純客観的変数の抽出をプログラムすることにより，computerによる自動診断も可能となると考えられた。

## 415 肝シンチグラフィーによる急性重症肝炎の診断と経過追跡

池岡直子，塩見　進，針原重義，黒木哲夫，
山本祐夫（大市大，三内）下西祥裕，池田穂積，
浜田国雄，越智宏暢，小野山靖人（同，放射線科）
門奈丈之（同，公衆衛生）

急性重症肝炎の肝シンチグラフィを用いた診断能について検討を加えた。さらに，生存例においてはその経過追跡成績にも検討を加えた。発症後14日以内に肝シンチグラフィを施行しえた急性重症肝炎20例を対象とし，さらに通常の経過の急性肝炎44例も対象とした。解析は①脾の描出，②骨髄の描出，③肝の大きさの指標としてALI（肝面積／（体横巾）$^2$），④肺の描出の4点について行った。急性重症肝炎は急性肝炎に比べ脾の描出および骨髄描出の著明な例が多く，またALIも低値を示す例が多かった。さらに林の数量化理論第Ⅱ類を用い上記4項目にスコアーを与えることにより92.2%の診断率で急性重症肝炎と急性肝炎を判別しえた。経過追跡しえた生存例15例において，ALIは大部分の症例で2カ月後に正常に復しその後著変を認めなかった。また，骨髄描出は3～6カ月後には大部分の症例で消失したが，脾の描出に関しては6カ月以上経過しても軽度の脾腫が残る症例が多く存在した。

---

## 416 び漫性肝疾患に対するdynamic imageの有用性

関　松蔵，今枝孟義，広田敬一，鈴木雅雄，
又吉純一，土井偉誉（岐阜大・放）

$^{99m}$Tc-phytate 10 mCiを右肘静脈より，三方活栓を用いて急速注入し，直後に生食5 mlをflushした。1 frame 3秒毎に1分30秒（30 frame）まで作像し，30 frame目で，心と肝の黒化度比をみた。

慢性肝炎（非活動型）のなかには，static imageで全く正常パターンを示すものがある。これらの一部には，dynamic imageで肝RI uptakeの明らかな遅延を示す例が存在した。static imageでは鑑別困難な慢性肝炎と肝硬変症例に対しても，dynamic imageは有用であった。

従来用いられているComputer処理による心対肝放射能比の結果と本法（黒化度の比較）による診断とを検討したので報告する。

## 417 肝RIアンギオ蓄積像および肝ECTによるびまん性肝疾患の検討

小林　真，東　光太郎，大口　学，興村　哲郎，
宮村　利雄，山本　達（金医大　放）

前回の日本核医学会総会においてわれわれは肝RIアンギオ蓄積像について報告し，びまん性肝疾患，特に肝硬変の診断に有用である事を述べ，肝シンチグラムと相補的な診断情報を提供する事を示した。前回報告した視覚的肺肝濃度比による分類基準が肺肝カウント比による検討で妥当である事が確認され，40例についてのICG 15分値との比較では相関係数0.83と高い相関を示し肝RIアンギオ蓄積像肺肝比が有効肝血流量の評価に有用である事が認められた。

さらにECTにより肝体積，脾体積，肝脾放射能濃度比を計測した。上記パラメータと肝RIアンギオ蓄積像肺肝カウント比をもって，びまん性肝疾患の診断に有用か否かを検討し若干の知見を得たので報告する。

Presented by Medical*Online